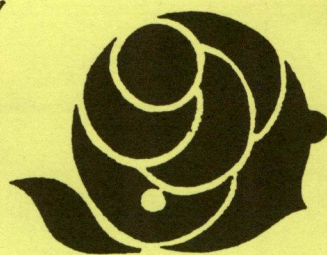


Rosa Pluma

ローザ・プルムラ

●茨城大学・大学教育研究開発センター



ニュースレター No.11

目次

巻頭言	1
しし座流星雨への願いごと	1
キャンパス情報	2
学園国際特集	
ー学園祭の今、これからー ...	4
聞いてほしい私の意見	
ー一年を振り返ってー	5
Voice	
ー読んだ、思ったローザ・プルムラー ...	7
教養教育古今東西	8
掲示板コーナー	10

(平成11年1月発行)

自分の大学時代を自分の将来のために活用しよう。過去から自分を解放し、現在を認識して将来を考えよう。世界のボーダレス化が進んでいるので、地球規模の視点で考えることが必要だ。

多様化する将来の社会の中で、自分はどのようなポジションを占めたいのだろうか。自分の好きなことや得意なことは何か、それらと将来の社会との接点は何か。その結論を出すために幅広い学習が役立つだろう。

ターゲットが決まったら、そこに到達するためにすべきことの順序を考えよう。将来の自分のために、今やっておかなければならないことは何か。地球規模の将来の社会は流動的であるから、時代の変化に対して柔軟に対応できるよう、可能な限り基礎的な知識や総合的な判断力を培っておくのが良い。もちろん、ターゲットへの着実な歩みとなる専門力の醸成は不可欠だ。

非情に聞こえるかも知れないが、事に臨んで最後に頼りになるのは自分である。大学時代を活用して、頼れる自分を創っておきたい。

(宮田)

しし座流星雨への願いごと

しし座流星雨が近づいた昨年の11月中旬頃、学生から質問された。「先生は、ノストラダムスの大予言を信じますか?」「1999年に大きな隕石が地球に落ちてくると云われますが、本当ですか?」先の問には数百年も前にたてられた予言など信じられないと即答できるが、後の問と結び付かれると答えに窮することになる。20世紀の最後の年への感慨は、社会、宗教、人々によってかなり異なったものがあるようである。云々ゆる世紀末に近づいた昨今、日本でもノストラダムスに関連した出版物も多くなり、'96、'97年には各13冊、'98年には20冊との情報がある。なぜにこの予言に関心が高まるのだろうか。ミカエル・ノストラダムスの四行詩で該当する箇所には、次のように書かれているのみである。「1999年の7の月 驚くべき偉大な王がやってくるだろう アンゴルモアの偉大な王がや

ってくる前に その前後、火星は幸福の名において支配するだろう」確かに謎めいた言葉が入っているので予言には適した文章なのかもしれない。しかし、どうしてこの四行詩が先の学生のための間に結びつけられて語られることになるのだろうか。巨大隕石の地球への衝突による恐竜絶滅説が認識されるようになったのは、1980年代からである。ノストラダムスの予言が日本で最初に話題になったのは、オイル・ショックのときのこと。昨今も長引く不況で就職もままならない状況がある。落ち込む気分も分からないわけではないが、このようなときであるからこそ真実を見極める洞察力を磨き、状況を打開する力を養って頂きたい。次のしし座流星雨の大出現は33年後に期待される。このときに、たくさんの楽しい願いごとができるように今を頑張りたいものである。

(横沢)

キャンパス情報

人文学部から

あけましておめでとうございます。後学期も残り少なくなり、まもなく後学期試験が始まります。前学期試験の時よりははるかに多くの科目の試験・レポートがあることでしょうから、計画的に勉強し、1年間の総決算として、是非がんばってください。これから3月までは卒業予定者や教員にとっては1番忙しい時期で、卒業や入学、大学院の修了や入学にかかわった仕事でスケジュールが埋まっています。それはそれとし

て、1年生諸君にとっては試験後は長い春休みですから、ふだんできない様々な活動に励んでください。

人文学科の1年生でまだ専攻所属が決定していない人にとっては、落ち着かない時期でしょうが、もう少しお待ちください。

この1年間は案外早く過ぎたのではないかと思います。われわれからみて、学生諸君が1年生から2年生、さらに3年生になるにつれて成長する姿が楽しみです。よく学びよく遊んで下さい。

(渡邊)

教育学部から — 教育実習で学ぶこと —

教員免許を取得するためには、あるいは教育学部の学校教育教員養成課程を卒業するためには、教育実習の単位を取らなければなりません。普通の大学授業とは違って教育実習には、当然ながら実習校の児童生徒と先生方という相手があります。これらの人とよい関係が結べないと教育実習はうまく行きません。これらの人は、学校という組織の中で行動しています。ですから、実習生の個人的な考えや価値観は種々あるでしょうが、まず学校と言う組織の中で先生方や児童生徒の考えや行動を理解し、教育技術も含めて教師としての考えや行動を積極的に学んでほしいと思います。

教育は熱意や善意が大事という精神論だけでも、教

え方の技術・法則があり、その教育技術を身につけるのが大事という技術論だけでも、うまくいきません。両方が大事であり、しかもどちらも相手があることを忘れてはいけないと思います。一方的に熱意や善意を発揮されては迷惑そのものでしょうし、児童生徒の反応に無頓着に教育技術を発揮したら逆効果になってしまいます。しかしそれだからといって、教師が消極的になったら児童生徒も暗くなって元気が出ません。

教育実習では、まず自分と立場、年齢等が違う児童生徒や先生方を理解し、どのように行動すればよい関係や教育機能の発揮になるのかを学んで下さい。

(金子)

理学部から — 理学部での転学部・転学科希望者へ —

理学部では、学科構成が複雑で、一つの分野が2学科以上にわたっていることもあり、入学後に自分の勉強したいことと所属する学科の内容が違っていると感じる学生が少なからず発生します。このような学生に対しては、1月に3年生への転学科試験を実施しています。真剣に、転学科して勉強したいと考えている学生は、理学部学務係で募集要項を請求してください。また、茨城大学に入学したけれどやっぱり理学部で勉強した

いと思っている学生に対しては、同時に転学部試験を実施しています。

どちらの場合も、次の年度の4月から3年生として受入れることになります。勉強の意欲が強固で、やりたいことがはっきりしていることが必要です。今いる学科で単位が取れそうもないから転学科してみようなどという人には勧めません。たぶん、試験にも合格しないでしょう。当然のことですが、教養科目を必要十

分な位履修していないと、せっかく3年生になっても

専門の勉強ができないことになります。

ー 地球生命環境科学科の学生へ ー

この学科では、3年生に進級するときに所属講座を決定します。2年生の1月末までには講座希望調査が行われ、所属講座が決定されます。3年進級後は、各講座のゼミなどに参加することができます。転学部転

学科の学生については、試験時に希望の講座を調査します。試験時に希望の講座が決まっていないうですと、よい印象を与えないかも知れません。

(田切)

工 学 部 か ら

「先生こんなのやって何になるの?」とはよくある質問のひとつです。ちなみに前の「の」は学問の意です念のため。この問にいきなり「黙れたわけ者」となることはまずありえないことで、それぞれに誠意ある答が返ってくることでしょう。私だったら、それを尋ねる前に学問そのもののおもしろさを発見する努力をせよと言いたところですが、目的意識をもって勉強することもまた大事なことであると思います。

何の役に立つかわかりながら勉強したい学生にはうってつけの授業科目が今度工学部にできました。企業などの研究所や工場で一定期間実習を行うと単位がもらえるというものです。実習というかわりに就業

体験などともいい、あたかも社会にでてそこで働いているかのような感覚または錯覚のなかで学習できるというのがひとつの目玉でしょうか。ほかの科目に対する学習意欲にも良い影響が期待されるところです。

このように、学生に就業体験をともなった学習の機会を与える制度をインターンシップ制度といいます。本学工学部では平成10年度からこの制度を導入しました。全国の国立大学にさがけてとまではいえませんが、早いほうではないかと思います。この制度による授業科目を開講する学科は、来年度は本年度と同じ電気電子工学科とメディア通信工学科の2学科ですが、その後はさらに増えて行く予定です。新しい刺激を求めて挑戦してみたいはいかがですか? (山中)

農 学 部 か ら

新年明けましておめでとうございます。1年生の皆さんは、受験から解放され、今までよりかなり自由度の大きい大学生活を始めてからもうすぐ1年になりますが、高校までとは違ったものが何かつかめたでしょうか。昨年の10月22日～25日の4日間、阿見キャンパスでは鋤耕祭が開催されました。最終日を除き、天気には恵まれませんでした。2年生を中心に3、4年生や大学院生も参加し、盛況のうちに終了しました。1年生も鋤耕祭の時の研究室訪問やコンパなどを通じて、農学部が少し身近なものになったのではないのでしょうか。11月11日には、農学部の各大講座の教務委員が水戸に出向いて、1年生の皆さんに対して、2年生から所属するカリキュラムの説明と予備的な希望調査

を行いました。例年のことですが、各カリキュラムへの所属希望人数がばらつききました。入学時にはっきりと方向性を決めていた人もいれば、調査の時まだ決めかねている人もいたようです。4月になれば、皆さんは水戸から阿見のキャンパスに移り、各カリキュラムに属して、いよいよ本格的な専門の勉強を始めることになります。カリキュラム配属の最終決定は4月でまだ先ですが、この1年間の体験なども参考にして自分のやりたいことをもう一度じっくりと考えてみるには今が一番いい時だと思います。1年生の皆さんが全員、生き生きとした顔で水戸から阿見キャンパスに移動してくることを楽しみにしています。

(白岩)

学園祭特集 — 学園祭の今、これから —

未来への提言、そして理想像

第49回茨苑祭も無事終わり、ほっとしている人も多いでしょう。今回の茨苑祭は寒さに見舞われながらも大勢の学生、一般客が見物に訪れておりそのひとりに感想を尋ねたところ「活気があって良いね」と言っており、参加している一学生として嬉しく思いました。しかし、その活気を利益中心の模擬店だけに費やして良いのでしょうか。もちろん、音楽・文科系サークルの活動は非利益なのに大変な活気がありました。しかし、なにか足りないものが有るのではないのでしょうか。

学園祭は学生の日頃の学問や研究、課外活動を学外の方に見てもらうのにも絶好の場所であると思います。また、生産性を伴うものでないといけないとも思います。残念ながら二つとも利益中心の活動におされてしまい、それが見られません。本学のみでなく、これからの学園祭を考えていくうえで、この二つのことは大きなキーワードになるでしょう。

その二つをリンクして未来への提言を。まず、利益を追求させない為に、サークルの人数ひとりあたりの適当な利益を事前に算出し、過剰な利益は特別な場合をのぞき実行委員会に寄付します。その上で、実行委

員会は利益を学外に還元します。例えば、聾学校に学習用具を送るとか、海外の恵まれない子ども達に寄付するとか。また、茨苑祭で研究発表する団体や学生に援助金を出して、本学の研究活動や奉仕活動に貢献することもできます。

欧米の大学同様、本学も社会に対してその、存在価値をアピールすることが大切です。時代の流れと共に、学園祭もその姿を変えてきました。それが本学にも求められています。もちろん、これまで挙げたことは理想論に過ぎません。しかし、試行錯誤の結果、未来の学園祭の理想像が見えてくることは間違いないでしょう。

(学生新聞部 編集部編集長 田村淳一郎)



鍬耕祭をおえて

鍬耕祭をおえてまず最初に思ったことは、「とりあえず終わらすことができた。」です。4月に前実行委員の先輩から引きつぎ、手探りで準備を始めていきました。私達は鍬耕祭の前に1年生の歓迎コンパを企画し水戸で行いました。それからとても長くつらい、しかし充実した鍬耕祭までの日々がスタートしました。スポンサー集めからステージ企画について考えたり、土浦駅から学校までの仮装パレードを提案したり、1つのことを考えてそれを行い、無事に終了させる。そのむずかしさをこの鍬耕祭実行委員の仕事をとおして実感させられました。実行委員の中で話しあって決まったことを掲示板などで学生に伝えようとしても、なかなか伝わらず代表者会議のときに集まっていない人たちもいました。私達の連絡方法に問題があったという

所もあると思いますが、学生のみなさんの参加意識も少し低迷してきているのかもしれませんが。これは実行委員の私達にとっては悲しいことですが、一生懸命参加している学生達がいる限り文化祭はなくさない方がいいと思います。その文化祭を成功させるために頑張っている実行委員もいるのですから。

(鍬耕祭実行委員長 原田 隆志)



聞いてほしい私の意見 — 1年を振り返って —

浦上 育子 (人文学部2年)

今日もまた電車で揺られ、ある時は本を広げ、音楽に耳を傾け、またある時には心地よい眠りに誘われながら、私は片道2時間の道のりを通い来る。

忙しい生活を送ろうと思えば忙しく、自由気ままにと望めば自由に、のんびりと過ごしたいならのんびりと過ごせる大学での生活は、自分のペースを見つけたなら、理不尽に崩されることがない素晴らしいものだが、同時に自分自身の責任で管理していかなければならないものでもある。去年は勝手に分からずに周囲を気にして、あっという間に終わってしまったが、要領が分かってきたからなのだろう、つい怠けがちになる自分を叱咤しつつの毎日だ。

対人関係で苦労したくないという思いを胸に抱えたまま始まった大学生活だが、人間関係から逃れようと思えば容易く逃れられるのが逆に寂しく、やたら必死になって学友との親交を深めていた去年。自分で自分の意図を見失い、精神的に疲れて沈みがちになること

もしばしばだった。マイペースが一番と悟り、気楽にのんびり行こうと決めた今年は、本格的に専門科目を履修し授業自体の大変さは増したが、精神的に大きなゆとりを持って生活できたと思う。

精神的な安定をもたらしてくれる愛すべき友人達に恵まれ、私の大学での生活は益々充実している。彼らと語らいながら日が暮れ、また空が白むのを眺め、猛暑に汗でシャツが背に張りつくのを感じ、極寒の中手先がかじかむのを必死で暖める。そんな平和な日常が少しでも長く続いて欲しいと願うのは、いつか終わりが来ることを知っているからなのかもしれない。しかし、だからこそ大切にしたいと思うのかもしれない。最近私はよくそんなことを考えては物思いにふけているのである。

加野 幸恵（工学部2年）

先生から、この原稿を書くようにと言われ、1年間を振り返ってみた。そこではじめて、1年の目標を何も決めていなかったことに気がついた。

そういえば、1998年は今まで以上に友達と遊びまくっていた気がする。けれども、はたからは怠惰な生活をおくっていたように見えるかもしれないが、私自身は、心に余裕を持って生活することが出来た、いい年だったと思う。

ところで、大学時代には、ある程度自由な時間をまとめて多く持てる。だから、人生の中でも、新しいことに、特にチャレンジしやすい時代だとおもう。1年の時は、大学のシステムに慣れるのに精一杯であった。

理崎 一成（工学部Bコース2年）

大学生生活も2年目をむかえて、様々な面で余裕ができました。Bコースであるので、高校生の時とは違った時間に慣れなければなりません。私は、昼にアルバイトをして夜に授業を受けています。1年生の時はどうしても朝起きるのが遅くなったり、授業中眠かったりしましたが、今年はそのようなこともなくなってきました。一人で生活することもだいたい慣れて、勉強する時間と遊ぶ時間の作り方もだんだんできるようになりました。特に勉強する時間を作るのには苦労しました。1年生の時には、すこしぐらい夜遅くなってもやっていけると思いましたが、昼にアルバイトをすることを毎日続けるときつくなります。そのようなことを考えて、自分の生活リズムができたのも最近のことです。生活の面ではこのような所が印象に残っています。

授業については、次のようなことが言えます。まず一つとして、電子と機械の2つのコースのどちらかを選択する形があることです。1年生の時には、数学や物理学などの科目を与えられたとおりに受けていればよかったのですが、今年からは違いました。自分のやりたいコースを選択して、科目を選択しなければなりません。Bコースなので、選択できる科目は限られています。選択するとすれば、与えられた、2科目から

それ以前までは日々の生活に精一杯で、自分から何かに取り組むということにあまり熱心でなかった。しかし1998年は、気持ちに余裕が出来たため、積極的に自分から行動を起こしていこうと言う気持ちになることができた。また事実そうしていた。

まだまだやりたいこともあるし、これからもっといろいろなことにチャレンジしていくつもりであるが、1998年は、そう思うことができた、という意味でとても有意義な年であった。行動を起こすための導入の年であった。

1998年は、1年の目標がなく、目標を達成することも、もちろんできなかったけれども、今後の私を決めるためのとても重要な年であった。

一つを選択するようなものです。しかし、どちらを選択するかはあまり悩みませんでした。大学入学前に、このような制度でやっていることは知っていましたので、どちらを選択するかは最初から決めていました。実際に選択したのは電子のコースです。これから、どのような授業があり、どのようなことをするのかは当然よくはわかりません。周りの人の話を聞けば、機械のコースのほうがいいという人もいます。しかし、大事なのは、自分が何をやりたいかということだと思います。このコースを選んだから、このような仕事につかなければならないというわけではないので、これから授業を受けながら、将来、つまり卒業してからやりたいことを決めたいと思っています。

今年一年を振り返ると、自分の将来について考えることができた一年であったと思います。



Voice — 読んだ、思ったローザ・ブルムラ —

大津 正一（教育学部3年）

ローザ・ブルムラが存在していたことは1年の時から知っていました。でも、2年になると共通教育棟にはあまりいかないのでお目にかかること少なく、ちょっと忘れられた存在になってしまいました。しかし、あらためて読んでみると、結構いいことが書いてあるではないですか。先号（10号）を読んでみて共感した記事が2つありました。

1つは教育学部の江幡先生が書かれた記事です。この記事は私も同感で教育というものは教師と学生による相互教育活動であると思います。相互の協力なくては教育は成り立ちません。しかし、学生の自発的な学習がなくても困ります。そういった意味で、大学は「学校」とは違います。学校というところは勉強するところです。（漢字から「つとめることを強いる」と解釈できます）一方、大学は強いられて勉強するところではなく、自ら学を問う、つまり学問を行なうところです。それゆえ、学生の積極的な努力なくては大学の意味がありません。

もう1つは、生越先生の記事です。大学教育の目的

の1つは豊かな人間性の形成です。

人間性を形成していくところとして大学は適しています。場としての「大学」には2つあります。それは学問の場と出会いの場です。学問の場の意味では前の通りです。出会いの場としての大学には教官との出会い、他の学生との出会いがあります。教官と出会うことで高度な知識を得ることができ、また礼儀も知ることができます。学生との出会いでは他学部との交流や意見の交換などでこれまでの自己よりも広がった新しい自己へと出会うことができます。これは単に知識の蓄積だけでは経験できません。他人とのコミュニケーションによって経験できます。そう考えれば、教養科目の履修は講義を聴くためだけのものではなく、人との交流の機会を得ることも目的の1つになりえます。

以上のことから、教養を身につけることは大切であり、大学というものの存在がいかに大きいかわかります。そんなことをこのローザ・ブルムラを通して考えさせられました。皆さん方は大学というものをどう考えているでしょうか。

皆藤 由美（理学部2年）

私は今回、この原稿を書くことになってはじめて、「ローザ・ブルムラ」を読む機会を得ました。それまでは、あまり気にとめていなかったもので、手にとって読んでみようと思ったことはありませんでした。

しかし、今回初めて読んでみて、ローザ・ブルムラには意外にも読んでみておもしろい話やためになる話がいくつか載っていました。どんなものでも読んでみないと、おもしろいかどうかなんて分からないものだと思います。

ローザ・ブルムラは主に、教官や学校関連のページと、学生のページの2つに分かれています。教官や学校関連のページには、各教官の考え方や日立・阿見キャンパスの状況が載っていて、大学に対する視野が広がりました。

さらに学生のページには、大げさかもしれませんが、

私にとって教訓になるような話が載っていました。その話を読んで、今までの自分の大学生活に対する意識が、「あそび」から「何事もチャレンジ」へと変わりました。そして、過ぎ去った過去は戻らないのだと改めて考えたとき、もう二度と取り戻すことのできない“今”という時間をもっと大切に過ごそうと思いました。

今回、ローザ・ブルムラを読んで、多くの人の考え方などを知ることができ、私の視野はいろいろな方向に広がった気がします。だから、ローザ・ブルムラをまだ一度も読んだことのないたくさんの方に読んでもらいたいと思います。

廊下に置いてあるという程度しか知らなかったローザ・ブルムラは、今回の原稿を書き上げた私にとって、多くの人の声を聞くことができ、自分の視野を広げ、新たな自分を発見するきっかけを与えてくれる身近な存在になりました。

教 養 教 育 古 今 東 西

教養とは、中途半端な専門より役に立つ場合がある。必要なときに役立てられるように身に付いている広い知識が教養といえるのではないかと私は考える。それらは、自分で経験によって学ぶより、専門に学んだ先生から教養科目として教育される方が遥かに効率よく知識を吸収でき、多くを学ぶことができる。そして教養を身につけていれば、物事を広い視野から見ることができ、先を見る判断を誤ることも少なくなるであろう。

これから世の中がどういう方向に進んでいくか、また、どういう方向に進めなければならないかは、大学教育を受けた程度の人間なら、誰でも関心を持ち、正しい方向へリードして行けるのが望ましい。日本はバブル期に、判断を誤り、土地や株の値上がりが続くものと思い、無駄な方面に投資を続けた者が多かった。バブルの崩壊とともに、事業に失敗し、借金の返済ができなくなってしまった例がある。こうした失敗は真に教養のある人間は避けられたと言えないだろうか。

専門の研究に行き詰まったとき、一時、専門以外の勉強をしてみると、本来の研究が飛躍的に進んだという話を聞いたことがある。それは、専門以外の知識が直接役立つこともあるが、その知識を得る課程で何か

ヒントが得られたということもあると思う。物理の研究をしている者に一時、生物の研究をさせたところ、本来の物理の研究を進めることができたという。日本人の米国皮膚科学研究所所長の講演会での話である。脳は全体を使わねばならない。一カ所だけを使っているのは、働きが鈍るというのである。この研究所では老化の研究もしているという。体の使わない部分は退化する。脳も若いときから全体を使い続けなければいけないということであった。

大学生は専門の勉強をするが、その専門は高校生の時に選んだものである。その選択が必ずしも、自分に向いているとは限らない。自分の本当の適性を知るにも、知った後の進路変更にも、また単なる生き甲斐や楽しみのためにも教養教育が役立つことがある。世の中が複雑になれば、尚一層教養となる学際的な学問が必要である。景気が低迷している現在、大学で専門性ばかりに力を入れてもその専門を生かせる職業に就くのは難しい。柔軟性ある幅広い人物になるため、大学での教養教育は大切と考える。そして、広い教養の上に、特に他より秀でた専門性を身につけた人間になるのが望ましいと思う。

江口 美佳 (物質工学科)

モンリオールでの一夏

モンリオールに着いてすぐ、そのヨーロッパ風の街並みにすっかり魅了されてしまった。日本に帰る頃には、「もう帰っちゃうの？もっとここにいたい」と思うほどこの街が気に入っていた。モンリオールは、「人種のモザイク」と言われるほど様々な国の人が集まっている街だ。人々は、常に「他者」と接して暮しているためか、お互いに協調して生活していく術を十分に心得ている様に思えた。異文化に対する豊かな理解力を持ち、優れた国際感覚を身につけた真の国際人が住む街、それがモンリオールだ。

モンリオールは「バイリンガルの街」である。ケベック州では人々は皆英語とフランス語を話すという



予備知識はもっていたが、実際に生活してみて初めて、「バイリンガル」とはどういうものかを体験的に理解することができた。パンフレットやレストランのメニューはすべてフランス語と英語で書いてある。道で見かける看板はたいていフランス語、お店のレジ係の人は私がフランス語を話せないにも関わらず、平気で「Bonjour!」なんて話かけてくるのだ（もっとも、私も帰る頃には「Merci」くらいは言えるようになってはいたが）。また、私は複数のカナダ人と友達になることができたが、彼等の友人のバースデーパーティーに招かれたとき、彼等の会話が英語からフランス語へ、またフランス語から英語へと自在に変化するのを目の当たりにして、「これがバイリンガルなんだ!」と感激したことを覚えている。



McGill大学では、週5日、ネイティブの先生の授業を受けた。教室内では「英語で話す」が原則で、日本語での会話は禁じられていた。そして、「とにかく自

分の意見を英語で表現してみる、誰かが発言しているときはしっかり聞いて理解してあげる」という暗黙のルールができあがっていた。まず始めにRとLの発音を習った。先生と同じ口の形をつくって発音してみるのだが、これが意外に難しい。文法中心の日本の英語の授業がうらめしく思ったものだ。でも講座が終わる頃には、なんとかRとLの違いを区別できるようになっていた。授業は、発音の基礎の練習の他にも、ロールプレイやディスカッション、プレゼンテーションなど会話重視の授業であった。また、授業はクラスの中だけにとどまらず、美術館見学やハイキングなどの課外活動もあった。先生はとても活動的な女性で、生活に関する情報をたくさん与えてくれた。たまにランチと一緒に食べることもあった。私達と彼女は互いにファーストネームで呼び合った。彼女は私達の良き先生であり、かつ親しい友であった。

McGill大学での授業を通して、「自分の意見を英語で伝える」ことの重要性を改めて考えた。道具としての英語を身につけるためには、まず相手が納得するような英語を話せなければいけない。しかし、私は実践が足りないせいか、どうしてもうまく自分を表現することのできないもどかしさを感じた。今回「McGill大学夏季英語集中講座」に参加し、使える英語の重要性を改めて認識し、かつ異文化の中で生活することの楽しさを体験した。この貴重な経験をこれからの学習の糧にしていきたいと思う。

山崎 綾乃（人文学部2年）

掲 示 板 コ ー ナ ー

放送大学茨城学習センターだより

大学の皆さん、茨城大学のキャンパス内に放送大学の茨城学習センターが設置されているのをご存じでしょうか？ 講堂の近く、地域総合研究所の隣にあるのが学習センターです。

放送大学は社会人の生涯学習の場としてつくられたものですが、18才以上ならば誰でも入学できます。在

学生は、主として大学卒業の資格を目指す方や、何らかの資格取得のため必要な科目を修得することを目的とする方、資格とは関係なく、じっくりと系統的に勉強したいと思って、放送大学に入学される方などです。

近く茨城大学と放送大学の間で単位互換協定が締結される予定になっています。これが成立した場合、勿

論ある制約のもとに茨城大学の在学生在が放送大学の単位を取得すると、それが大学の卒業単位になる道が開かれることになるでしょう。そうすると、たとえば、工学部や農学部在籍している学生が、放送大学の教養科目が修得する上で大変便利になると思います。また、現在放送大学では、300科目以上の授業科目が開講されていますので、大学で開講していない科目で学生が興味を持っている授業も多いかと思います。

放送大学に入学しますと、教材が送られてきます。これとテレビやラジオを併用して、学習することにな

ります。学期中頃に通信指導（レポート提出）があって、学期末に単位認定試験が行われ、これにパスするとその科目の単位が与えられるようなシステムになっています。興味をお持ちの方は、センターの事務室までおいでください。センターの見学も歓迎です。

以上、放送大学のPRを若干させて頂きましたが、当センターはこの地域の生涯教育の拠点の一つとして、今後とも努力を積み重ねていきますので、引き続き大学のご援助とご理解をお願いする次第です。

（栗村芳實）

FD（ファカルティ・ディベロップメント）研修会の開催について

新しい教養教育理念のもとに、平成8年度より開始された4年一貫教育体系を追求するカリキュラムの実績を点検・評価し、教養教育の抱える問題点について検討するとともに、学生の多様化に伴い教育内容・方法等の研究・開発を行うFD（ファカルティ・ディベロップメント）活動への認識が高まりつつあることか

ら、FDの概念と実際について講演会を開催し、今後の教養教育カリキュラムの改善に向けて研修会を下記のとおり開催いたします。

1. 開催日 平成11年3月8日(月)～9日(火)
2. 場 所 国民宿舎【水郷】（土浦市大岩田255）

企画室から

1. 教養科目後学期定期試験について

教養科目の後学期定期試験が2月4日(木)～10日(水)に実施されます。定期試験の時間割は試験日の1週間前に掲示されますので、各自確認の上、受験上の心得に則り学生証を持参し、受験してください。

なお、学生証紛失等により再発行を希望する場合は、学生センター証明書関係窓口（学務企画）に申し出てください。

2. 後学期成績通知書の交付について

後学期に履修した教養科目の成績通知書は、4月初旬各自の所属学部において、交付されますので、所属学部の掲示板に注意しておいてください。

3. 講義棟における盗難について

最近講義棟等における盗難事件が多発しています。講義室及び更衣室等には荷物等を放置しないよう各自注意してください。

つばき

みなさん！あけましておめでとうございます！！

お正月は楽しく過ごせましたか。今年度もみなさんにとって良い年となるように願っています。ところで、みなさんにとって去年は充実した年であったでしょうか。自問してみてください。いつの間にか時間が過ぎていたという人が多いのではないのでしょうか。勉強でも課外活動でも何でもいいんです。「私は〇〇〇に全力投球した」といえるように、有意義な学生生活を送ってください。あつという間の4年間ですから…。

さて、今号も盛りだくさんの内容となっています。特集記事の「学園祭の今、そして未来への提言」では、実行する側と参加する側の本音が聞けます。「ローザ・ブルムラを読んで」には、われわれ編集委員も勇気づけられました。そのほかにも「一年を振り返って」や「教養教育古今東西」など、どの記事も興味深い内容ですので是非目をとおしてみてください。というわけで、今年も「読みやすい、おもしろい、役に立つ」ローザ・ブルムラを目指していきたいと思います。みなさんのご愛読をお願いいたします。

（S.N）

発行日 平成11年1月

発行者 茨城大学 大学教育研究開発センター
水戸市文京2-1-1

029(228)8416 [企画室教養教育係]